

風の便り(第47号)

発行日：平成15年11月

発行者：「風の便り」編集委員会

コミュニケーションの原点―「発表会」を問う

1 「表現力」を問う

表現とは何か、表現力とは何か？この両者を明らかにすることは教育成果の原点を問うことに等しい。何故なら、人間は社会生活を営み、社会生活は人間相互のコミュニケーションによって成り立っているからである。教育の原点の一つは共同生活のコミュニケーションを教えることである。

この時、コミュニケーションとは表現の交換であり、意志の交流であり、感情のキャッチボールである。自然の風物は巧まずして美しいが、その多くは表現ではあるまい。風物の多くは、現象ではあっても、表現にはならない。風物は表現意志を持っていないからである。

一方、人間は自然の一部でありながら、自然から独立した意志を有する。花を植えるにも、家をたてるにも、町を作るにも意志を伴う。人間の表現には表したいという意志や欲求が伴う。一軒の家が自然の中に配置された時、風景は表現になる。

人が自然と家を素材に風景を演出したからである。それゆえ、表現欲求、表現意思のないところに表現はない。意志を持つという意味で表現は極めて高度な動物的、人間的能力だと言わなければならない。

もちろん、表現の意志だけでは、表現の豊かさは保証されない。したがって、表現と表現力は当然別のものである。表現力は相手に届いて初めて「力」になる。対象に届かない表現は「力」がないのである。表現力の貧困とは表現されたものが「相手に届かない」という意味である。当然、表現力が貧しければ、コミュニケーションも貧しい。人間生活の原点が貧しくなる。学芸会も、発表会も、豊かなコミュニケーションの力を目指している。学芸会も発表会も子どもの表現の質と量の点検が目的である。

1. コミュニケーションの原点―発表会を問う― P1
2. 品質管理の思想 P5
3. 「不登校」の処方箋：保護者の責任、子どもの責任、
学校カウンセリングの機能不全 P6
4. 第40回生涯学習フォーラムレポート P10
5. Message To and From P11
6. 編集後記：おれは「潜在的疾患者」か P14

2 表現力の構成要素

「表現力」もまた「教育力」とか、「老人力」とか、「市民力」等という抽象的な概念の一つである。したがって、子ども達の表現力の具体的中身を論じなければならない。今回はたまたま小学校の発表会を見せて頂いた。その限りにおいて言えば、子どもの表現力を構成したものは「声量」であり、「発音」の明確さであり、「セリフの意味と格調」であり、演技の「動き」であり、「表情」であり、個々の子どもの舞台上での「相互関係」であり、伝えるべきメツ

セージの「構成」などであった。照明の当て方とか背景画の描き方、バックグラウンド・ミュージックなどはこの際枝葉の問題であろう。子どもの表現力の向上を目指すためには具体的に何をどうするのか？それは声量を鍛えることであり、発音を正確にすることであり、動きを演出することである。要するに、上記の構成要素をどう指導するかが問われるのである。

3 聞こえないセリフはセリフではない

学校において、聞こえない講義は講義にはならない。同様に、発表会の聞こえないセリフはセリフではない。見えない演技は演技ではない。遠いダンスも観客のために踊られたダンスではない。聴き手に聞こえて初めてセリフである。したがって、聞こえないセリフは表現ではない。聴き手に届かないあらゆる発表は発表の名に値しない。

にもかかわらず発表会の半分のプログラムは後ろの席まで聞こえない。時には真ん中の席にすら聞こえない。子どもの発表会は発表する子どもに耳を傾けてやらねばならない。拍手も不可欠である。それが「応援環境」である。しかし、応援するにも聞こえない発表には応援のしようがない。見えない演技にも拍手のしようがない。

上記の観点に照らせば、哀しいかな、発表プログラムの大半は「落第」であった。セリフは聞こえず、舞台に掲げられる発表会の資料は細かすぎて、遠視の人にしか見えはしない。後ろの席に私語が多いのはそのためである。人々がうろうろするのもそのためである。人々の興味を惹き付け得ないからである。会場がだれるのはそれらの複合的な結果である。客席に資料が見えるためには太字の「キーワード」だけを使うしかない。情報が多すぎれば、子どもも、客席も消化できない。発表会は大学のゼミではない。詳細を伝えることは出来ない。観客も詳細は望んでいない。発表が客席に届くためには、学んだことの重点に限定しなければならないのである。

発表に変化を持たせるための工夫は必要である。それゆえ、会場の参加を促すプログラムは有効である。しかし、会場に聞こえなければ、応援の保護者も参加のしようがない。事前に、参加協力を依頼し、参加の仕方を明示しなければ会場も戸惑うばかりである。当然、解説の子どもにはマイクを使わせなくてはならない。長いセリフは短く、単純化しなければ聞こえない。小さな教室の予行演習で成功しても、大舞台では効果が異なる。体育館の舞台では声すら聞こえず、字も見えないのである。指導教員の経験不足は明白であった。現代の発表モデルは「テレビ」である。しかし、体育館にはテレビスタジオの設備はない。「アップの映像」は不可能であり、「ズーム」の演出も不可能である。子ども達の声を拾う音響ですら十分ではない。だからこそ工夫が可能になるのである。テレビの真似で子どもの学習成果は表現できない。

発表に変化を持たせるための工夫は必要である。それゆえ、会場の参加を促すプログラムは有効である。しかし、会場に聞こえなければ、応援の保護者も参加のしようがない。事前に、参加協力を依頼し、参加の仕方を明示しなければ会場も戸惑うばかりである。当然、解説の子どもにはマイクを使わせなくてはならない。長いセリフは短く、単純化しなければ聞こえない。小さな教室の予行演習で成功しても、大舞台では効果が異なる。体育館の舞台では声すら聞こえず、字も見えないのである。指導教員の経験不足は明白であった。現代の発表モデルは「テレビ」である。しかし、体育館にはテレビスタジオの設備はない。「アップの映像」は不可能であり、「ズーム」の演出も不可能である。子ども達の声を拾う音響ですら十分ではない。だからこそ工夫が可能になるのである。テレビの真似で子どもの学習成果は表現できない。

4 「がまん会」にしてはならない

上級生の劇や発表が何ひとつ聞こえないのに、最後列で、静かに自分の出番を待って待機してい

る下級生は、今時の子どもにしては耐性がある、偉かった。しかし、発表会を「がまん会」にしてはならない。「分からない事」は下級生にとってはいい迷惑である。退屈な上に、上級生の演じる姿から学び得る最高のチャンスも逸している。ざわついている後部席を抜けて、体育館の2階の回廊に上がってみると、会場の全体が見える。セリフはもちろん聞こえない。幼児のかわいいダンスも遥かに遠い。見えない演技は演技にはならない。客席に花道を設けて子ども達をなぜ舞台から観客のまん中に下ろさないのか？自分達の目の前で躍動する幼子のダンスを見れば保護者は熱狂する。

下級生に限らず、見えない踊り、聞こえないセリ

フは退屈に決まっている。2階の回廊では手伝いに来たボランティアの高校生数人が居眠りをしていた。哀しいかな、か細い表現では到底2階の回廊には届かない。発表会の迫力は高校生の好奇心に届かない。貧しい演出は高校生のボランティアスピリットを喪失させるのである。高校生が鈍感なのではない。発表会が鈍感なのである。高校生にとっても、子どもの表現が届けば、かわいくて、面白いプログラムが並んでいる。しかし、如何せん、聞こえないセリフはセリフではない。遠く霞んでいるダンスは自分のために踊られたダンスではないのである。

5 観客の中へ！

政治運動は「人民の中へ」入って行って初めて政治運動となった。「ヴィナロード(人民の中へ)」と言ったと記憶している。初めて人々に思想表現が届いたのである。これに倣えば子どもの発表会は「観客の中へ」である。子どもが観客の中へ入った時、聞こえないセリフも初めて聞こえる。客席に降りてきた演技は、身近で自分のために踊ってくれているように感じる。

通常、学校の講堂や体育館は舞台と客席に二分されている。それゆえであろう。先生方の頭も舞台と客席に二分されている。結果的に、発表は舞台でしかやるものではないと思い込んでいる。それゆえ、子どもの表現・発表はすべて舞台で行なわれる。保護者は客席から子どもの演技を見る。子どもが舞台の下に降りたのは全員が舞台に乗り切れない場合のみであった。そうなれば舞台と客席を一体化することは難しい。現状の子どもの演技力、表現力だけで観客を巻き込んで行くのは簡単ではない。それだけでなく「声量」、「発音」、「動き」等は不十分である。もちろん、音響設備も決し

て完備されてはいない。セリフを観客に聞かせ、演技を観客に実感させるためには、時に子どもを舞台から降ろして、観客の目の前に連れて行かねばならない。そのためには客席の真ん中を空けて「花道」を作ればいい。歌舞伎の花道も、ギリシャの円形劇場も、要は、演技者と観客の距離をつめるための工夫であろう。歌唱力のある歌手ですら、時に舞台を降りて、客の中で歌う。舞台の前下は空いていたのである。初めから数人の子どもはそこに降ろしておけばいい。美しい日本語の暗唱・朗誦は客席を囲んで、子ども達を「コの字型」に整列させれば、「枕草子」も、「雨にも負けず」も朗々と客席に降り注いだであろう。「みつばちマーヤ」も「プチネコのタンゴ」も、英語で歌う「The Number Rock」も、子ども達が客席を進行して歌い、踊った時、拍手は降るように湧き、保護者は子ども達の健気さに思わず泣いたであろう。会場の熱気に煽られて恐らくは高校生も目覚め、惜しみない拍手を送ったであろう。

6 進行管理表(者)の不在

一つ一つの発表は子どもの表現力を問うているが、発表会のもち方は学校の表現力を問うている。今回、発表会を見て改めて自覚したことがある。学校は教科教育の専門機関ではあっても、表現

指導の専門機関ではないのである。子どもに放送を任せるのもいい。子どもに照明を担当させるのもとてもいい。しかし、幕間が空き過ぎたり、全体の進行がぎくしゃくすれば、発表会は失敗である。それ

を防ぐためには校務に教務主任がいるように、発表会には、全体を見渡す進行管理者とプロデューサーが必要である。その下に子どもをつけて、行事の企画・進行を学ばせるのは最高の「体得」機会である。しかし、そのためには全体と部分の進行シナリオがなければならない。子ども達は事前にそれらをマスターしておくことが不可欠である。リハーサルはそのためにある。子ども達はアナウンスの放送内容は練習していても、プログラムの流れは理解していない。ぎくしゃくするのはそのためである。子どもにも演出や進行管理の練習をさせるべきである。プログラムから次のプログラムへの転換は、舞台の全貌、出演者の前後の動き、プログラムの中身が

分かっていなければ、準備が出来ない。幕間が空いて会場がだれるのは交代に時間がかかり過ぎることが一因である。一年生が演じた「たいこ」は、本物の太鼓の代わりに教室で使う普段の机を叩いたアイデアであった。演奏も良かった。しかし、幕間の準備に5分30秒を要した。子どもの打ち手を舞台の袖に待機させ、上級生がひとり一つずつ机を運べば、恐らく半分の時間で準備ができたであろう。発表会は展開のスピードと整然さにおいても客席を圧倒しなければならない。プログラムの順番が準備作業との兼ね合いで決まるのはそのためである。それゆえ、全体進行のシナリオはそれぞれの演技を統括する個別シナリオにおとらず重要である。

7 忘れられた「表現力」

学校フェスティバルはかつての「学芸会」と「祭り」の結合である。企画力、表現力、コミュニケーション力を試される。歌も、踊りも、暗唱も、表現であるが、アナウンスも、舞台設営も表現力を支える陰の力である。子どものあいさつも表現である。整列の仕方も、退場の仕方も、表現である。子どもに大人の紋切り型のあいさつをさせてはならない。「よろしくお願ひします」という意味のないあいさつなど繰り返させてはならない。あいさつは子どもの発表と努力を語らせなければならない。整然と入

場し、整然と退場する。その時、演技も表現も一段と輝くのである。舞台上に並んだ時身じろぎ一つなく「気を付け」の姿勢がとれるのも能力である。そこから集会の区切りが明確になり、「めりはり」が生まれる。世界の軍隊が一糸乱れず行進するのは表現力であり、行動力である。子どもの表現力も同じである。会場の準備も、プログラムの交代も表現力、行動力である。子ども達が出した「屋台」への客の案内と呼び込みこそは総合的表現力でなくて何であろう。

8 企画・運営の指導

会場には「会場係」がいる。舞台には「大道具・小道具」の係がいる。「照明係」も、「放送係」も必要である。プロデューサー教員の側には、全体進行を見渡す子どもの「進行管理係(MASTER OF CEREMONY)」を置いて発表会の企画・運営を体得させなければならない。子どもにアナウンスを任せる以上はアナウンスの基本を指導しなければならない。マイクの使い方も教えなければならない。舞台の設営を任せるのであれば、設営の基本を教えなければならない。会場係には受け付けと来賓の案内くらいは任せていい。学校はプログラムの

中身の発表だけを発表会だと錯覚していないか？ 会の運営全体が発表会である。企画・運営こそが世間で応用のできる最高の能力である。子どもも、大人もやったことのないことは出来ない。教わらないことは上手には出来ない。発表会は「体得」の絶好の機会である。体験から学ぶのは「学習」ではない。「体得」である。クラス発表や全体リハーサルの試行錯誤を通して子ども自身が「やってみる」ことが重要なのはそのためである。それこそが「総合的学習」ではないのか？

品質管理の思想

日産自動車が発動機にトラブルの可能性があると、数種類の自社商品、総計100万台を越えるリコールを行なった。初めて、わが家の車もリコールの対象となった。初めに本社から郵便による知らせが来て、続いて、販売会社の担当者から電話も来た。修理は40分ほどの簡単なものであったが関係者は初めから終りまで極めて丁寧であった。「品質管理」に手落ちがあって申し訳ない、という挨拶であった。”お陰で安心して乗れるよ”と返事をした。日本の”ものづくり”が世界から評価されているのも、企業が国際水準を達成したのも、「品質管理」の原則を曲げない思想のゆえであろう。ISO14000 等という標識を見るのも、品質を守るための生産工程の国際水準化である。

日産自動車のリコール方針に比べれば、日本の行政や教育界の品質管理は大いに問題がある。高校も、大学も送り出す学生を自らの”生産物”であるという自覚が乏しい。もちろん、学生の”商品価値”という発想は教育にあるまじき妄言として退けられる。社会教育で活動し、学校で教えてみると明らかであるが、どこの役所にも、どこの学校にも、仕事をしようしない職員がいる。自分の仕事を頑張ってやらなければ、仕事ができるようになる筈はない。教育も、行政も、仕事の「品質」を問わないという点で日産自動車の対極にある。それは商品価値にこだわる思想の欠如に起因する。サービスの価値を問わないシステムの背景は、行政も、教育も「市場」と絶縁しているからである。役所の無謬性の主張も、教育界の一方的評価の独善性も、サービスを受ける側の声が届かない仕組みに原因がある。これらの分野では、終身雇用制によって”クズ”の職員が守られ、教育の専門性の名において外部評価が遮断されているからである。問題役人や問題教員のリコールが出来なければ、当然欠陥学生も”トコロテン方式”で卒業させるしかない。世間は、自衛のために「安全な医者」を選び、信用のおける学校のランク付けをする。学生一般

の個別商品の「品質管理」が信用できない以上、生産者である学校の格付けをもって代替せざるを得ないからである。学校の序列化とか、偏差値輪切りという現象は教育界がまともな「品質管理」をやって来なかったことの裏返しである。学校の序列化は確かに困ったことであるが、個別学生、個別教員の品質管理をないがしろにしている事の方が何倍も困ったことであることに日本社会は気付いていない。

時に教育界は、競争は差別に繋がる悪だという。また、評価は支配と締め付けの代名詞であるとし理解していない。このような教育の風土こそが品質管理を拒否する原因である。競争と外部評価がなければ、怠惰となれ合いを排除できない。最も肝心の個人の資質と意欲を向上させることもできない。「平等社会は嫉妬社会である」とは渡部昇一の見識であるが、己の品質だけは評価させないという「無評価領域」も「平等社会」を前提にしている。平等社会とは人間の努力や仕事の結果の「品質管理」をしない社会の意味でもある。

人間の存在に関わることは、当然、すべてを市場原理に任せることは出来ない。だからと言って、教育に全く市場原理を導入しなければ、教育の水は腐る。教育に関わる人間の品質管理を拒否し、問題教員のリコールが出来ないのは、努力する人間のやる気を失わせる。仕事の品質管理が出来ない社会はいずれシステムの欠陥が露呈する。日本の様々な分野で、国際競争力の陰りが見え始めたのはそのためであろう。過度の競争は確かに危険であるが、競争がないよりは危険ではない。健全な競争のない社会は健全な「敗者復活」のシステムもない。品質管理が出来ない教育界は敗者が敗れた理由もわかりようがないのである。

「不登校」の処方箋

保護者の責任、子どもの責任、学校カウンセリングの機能不全

1 養育の責任

筆者の上五島行きはなぜか海が荒れる。そのせいか、遥々と来た、という実感がある。このようにむき出しの自然と対峙して育てば子どももタフになるだろう、と思う。ところが実態は必ずしもそうではない。

御縁が出来て以来、有川町は二度目の訪問である。帰途は夜になった。船から佐世保の灯りが遠く見える。帰宅は11時を過ぎるだろう。翌日は朝の便で北海道の仕事である。熟年の「生きる力」が試される時である。体力と耐性がなければ、1週間も連続する旅は持たない。まして愛嬌と勤勉を持続して町から町を廻る全力投球の”巡業”講演は難しい。強行スケジュールに耐え得るのは近年の生涯スポーツのお陰である。「生きる力」に幼老の違いはない。子どもの耐性に関する理論は熟年期の自分自身が研究の素材である。

山下教育長以下有川町の関係者は島の今昔を知り尽くしている。その生育歴を聞けば、みなさん大変お強い。海がみなさんの遊び場であり、生活の場であった。それに引き換え、現在の子ども

達を鍛えるシステムは機能しているようには見えない。「少年の危機」は養育の責任であることを痛感させられる。

筆者が基調提案を終わった時、事務局が事前に用意した質問を読み上げた。それは「不登校」の処方箋を問うものであった。上五島も例外ではないのである。今や「少年の危機」に地域性はない。筆者が少年問題を「風土病」と呼ぶのはその意味である。日本の文化風土に共通している。

質問は次のとおりであった。「すでに不登校に陥った子どもをどう指導するのか？」「苦しんでいる家族を周りは黙ってみているしかないのか？」講演が終了したあとの質問にしては問題が大きすぎ、中身が重すぎるのは明らかであるが、事前に関係者が相談した上でのご質問である。時間が足りないという理由だけで逃げるわけには行かない。覚悟を決めて以下の論理の要点を提案した。結果的に、当事者の保護者も、子ども自身も、学校カウンセリングも厳しく批判することになった。この時ばかりは、研究者は”辛い商売”である。

2 「守役」に預けよ！

保護者にはお気の毒であるが、子どもがすでに不登校に陥った時、保護者では治療は出来ない。何故なら、不登校の原因は、子ども自身、保護者自身だからである。並み居る保護者の前でこれをいうのは辛い。苦しんでいる保護者がいることを思えばさらに辛い。しかし、「子宝の風土」においては、原理的に、保護者は不登校の”治療”には向かない。不登校は保護者の養育の信念が原因である。「子宝」の過剰な保護が原因である。子どもの欲求を過剰に受容し、子どもの意志を過剰に

尊重したことが主たる原因だからである。子どもを大事にすることが保護者の信念である以上、保護者の養育方法は簡単には変わらない。それゆえ、保護者の手厚い保護の現状の中から子どもが自立を達成することは極めて困難である。

子宝の風土においては、子どもの自立は世間に頼み、他者の指導にゆだねると決まっている。それが「可愛い子には旅」の思想である。「他人の飯」の実践である。具体的な実行役は、伝統的に「守役」と呼ばれてきた。質問に直答すれば、「苦

しんでいる家族」には、わが子を他人に、それも厳しいトレーニングを請け負ってくれる他人に預けよ！と助言すべきである。「他人の飯」を食わせよ、とは子どもの思いや意志を聞くな、ということである。「他人」の下ではわがままも、勝手も言えない。引き受けてくれる他人は、制度的には、「ご養育係」

であり、「守役」であり、「めのと」であり、「乳母」であり、「指南役」であり、「師匠」であった。日本社会の現在の不幸はそうした「守役」が身近にいないことである。個別の例外的教員は別として、今の学校では「守役」にはなれない。学校もまた、保護と受容の理論で子どもに対処するからである。

3 原因の第一は「行動耐性」、「欲求不満耐性」の欠損

不登校や引きこもりに代表される現代の子どもへの挫折の原因はたった一つしかない。それはかれら自身の「弱さ」である。弱いとは「心身のがまん」が出来ないことである。子どもの「耐性」が欠如している時、不満も、がまんも困難と化す。一定の行動を持続することが出来ないのは「行動耐性」の欠如である。欲求不満で簡単に「切れる」のは、「欲求不満耐性」の欠如である。

専門家の書物の中には、10人の子どもの不登校には10通りの原因があるかのように書いてある。しかし、事実は決してそうではない。10通りの原因に見えるものは、10通りの「切っ掛け」に過ぎない。人生は様々であり、挫折の場面もさまざまである。思うとおりにならぬ困難は至る所にある。したがって、切っ掛けはもちろん子どもの数だけ多様である。但し、原因はたった一つである。子どもが現実社会の「負荷」に耐えるだけの「生きる力」を身につけていないということである。「生きる力」の基本はこれまで論じたとおり、「体力」と「耐性」を基本とする。学力もやさしさもルールに従うことも大切では

あるが、体力と耐性のないところでこれらの要素のトレーニングは出来ない。それゆえ、子ども自身の弱さを克服しない限り、子どもの不登校は解決しない。子どもの弱さは体力と耐性、なかならず欲求不満耐性の欠如に発する。遠回りのように聞こえるかも知れないが、不登校の処方箋は体力と耐性を鍛え直す事から始めるしかないのである。

保護者は苦しいであろうが、「生きる力」のトレーニングは原則として保護者の力では無理である。理由は明快である。保護者が養育のプロセスで子どもの「生きる力」を奪ったからである。保護者の養育方法こそが弱さの主たる原因だからである。したがって、結論もまた単純である。伝統の知恵が教えるように「他人の飯」を食わせ、「世間の風」に当たって、第三者の「守役」に自立のトレーニングをお願いするしかない。しかし、通常、現代っ子の周りには然るべき「守役」は存在しない。「守役」の意味を理解できず、「生きる力」の分析が出来ない学校カウンセリングに相談するのは次の点で二重の悲劇をもたらす。

4 不登校の第2原因は子どもの「現状肯定」

アメリカの心理学者ロジャースの流れを組む「非指示的カウンセリング (Non-Direct Counseling)」は、クライアント(相談者)本人を受容するところから出発する。「受容」とは本人の容認であり、現状の肯定である。極端に言えば、わがままも、勝手も、意志薄弱も、弱虫も、怠惰も、卑怯な言い訳も原則として、受け入れる。カウンセラーの基本は「積極的傾聴(Active Listening)」である。積極的傾聴は熱心に聞き、相手に理解を示し、同

意を示し、同感を表す。“ああ、そうだった”とか、“わかるよ”とか、“辛かったのね”と相づちを打つ。支持と共感を伝えるためである。要するに、相手の「現状肯定」から出発するのである。

そもそも現状に問題があるのに、「現状の肯定」から始めれば、子どもの立ち直る突破口を塞ぐことになる。学校カウンセラーを何百人配置しようとも問題が解決しないのはそのためである。弱い子どもは必然的に現実から逃避する。逃避の現状を肯

定すれば、子どもは問題に立ち向かうことは出来ない。現実には耐えて踏ん張る代わりに「気持ちは分かるよ」、「楽をしているんだ」というメッセージを送れば、のちの「挑戦」への方針転換はますます難しい。

不登校はいかように理屈を重ねようと学校の現実からの逃避である。100歩譲って、学校の環

境が耐えられぬほどに劣悪であったとしても、なお、耐える子どもは耐え、挫けない子どもは挫けない。論者はこの事実を忘れてはならない。子どもの気持ちを分かってやっても、困難を克服しなければならぬ状況は変わらないのである。

5 「負荷」を取り除くな！

解決は「負荷」を取り除くことではない。「負荷」に耐え得る「耐性」を形成することである。学校カウンセラーが積極的傾聴によって、子どもの心を開かせることに成功したとしても、不登校克服のために次は何をやるのか？子どもの気持ちを理解してもその辛さを分かってやっても、問題は一つ解決していない。積極的傾聴とは基本的に聞き役の技術である。学校カウンセラーは相談を受けても、耐性のトレーニングは出来ない。カウンセラーが「生きる力」を体現して圧倒的な迫力で子どもに向かい合うわけではない。不登校を克服するためには、多くの場合、辛くても止めてはならない。やりたくてもやってはならない。やりたくなくても頑張ってもやり抜かねばならない。師弟同行でなければそのような指導は出来ない。養育過程で保護者が出来なかったのはこのことである。子ども可愛さのゆえに、やりたいことはやらしたのである。子どもが不憫であるが故に、やりたくないことはやらなくていい、と

認めたのである。結局は、子どもの欲求を放任したのである。子どもが自分の欲求不満をコントロールできないのはそのためである。不登校の処方箋は子どもを180度方向転換させなければならない。同時に保護者の養育行動を180度転換させなければならない。不登校児童の保護者は自らの養育方法で良かったのだと信じている場合が多い。だから変わらないのである。子どもを変え、保護者を変え、厳しい基準に挑戦するという離れ業はほとんど不可能に近い。当然、学校カウンセラーができる範囲を越えている。昔から「子どもの走る坂道の小石まで拾うな」と言う。「大石」は拾うのである。人生の取り返しの付かぬ大事に至るからである。しかし、小石のような日常の小さな負荷を取り除いてはならないのである。「小石」で擦りむいても、躓いても、人生を狂わせるような大事にはならない。不登校は「小石」の負荷まで取り除いたことの結果である。

6 生きる「本能」

「本能」と呼ぶことが適切であるか否かを筆者は知らない。しかし、恐らく人間には生きようとする原初的な欲求がある。頭で死を覚悟した人も、水に溺れれば必至にもがくにちがいない。もがくのは肉体が生きようとしているからである。精神は時に肉体を支配するが、逆に、肉体が精神に影響を与えることもできる。肉体は疑いなく生きようとする欲求を内蔵している。不登校の克服は肉体の「生きる欲求」の活用が頼りである。疲れた肉体は必ず眠りや休息を欲する。空腹の腹は必ず食うことを欲する。生き物の原点がそこにある。人間の原点

もそこにある。人間の生活は、動いて、食って、眠るところから始まる。体力が生きる力の原点となるのはそのためである。体力が尽きた時、生き物の生存が終わる。体力が大切なのは「心身一如」の人間において、肉体の鍛錬はそのまま精神のがまん強さに繋がっているからである。不登校は、生きたいという「本能」に働きかけなければならない。本人の弱さが原因である以上、本人の肉体の鍛錬から始めなければならない。動けばお腹がすき、食べ物もうまい。疲れれば眠りが心地よい。ゆっくり休んで、食事を十分にとれば新しい活動を始める

ことができる。心身の負荷にも耐えることができる。その時、子どもの勝手やわがままは聞いてはならない。「甘ったれるんではない!」、「自分で生きるんだ」と断固として、言わなければならない。ほんの数か月の辛抱である。学校カウンセラーが子どもの心情を聞き出そうと聞き出すまいと、本人が生きることに目覚めない限り、子どもは己の弱さに立ち向かうことは出来ない。もちろん、学校に行けない子どもを不憫に思うだけの保護者に挑戦の強制はできない。「生きる力」の訓練は、体力と耐性の挑戦なのである。断固たる強制を含んでいるのである。そして、恐らく学校は断固たる強制は出来ない。現代の教育界は子どもの意志や主体性に振り回されて「他律」に踏み込む事は出来ない。学校カウンセラーは積極的傾聴によって、子どもの意

見や主体性を尊重すべきだと強調する。カウンセリングが子どもの現状を肯定する事から出発すれば、子どもの生きる基準を設定し、挑戦に送り出すことはますます難しくなる。

「受容」を強調する養育や教育では、誰も生きる力の原点を提示しない。一人前の基準への挑戦も勧めない。そして学校は「守役」の汗はかかない。「他律」とは基準を設定して、子どもの生活を他者が律することである。日々の暮らしの基準は他者が監督するが、基準を決めるにあたって子どもの意見を聞かないということではない。基準を決めてからは子どもの意見に振り回されないということである。「守役」を忘れ、「他律」を忘れた時、不登校を直す処方はない。

第41回生涯学習フォーラム

日時: 平成15年12月20日(土)15時～17時のち「もちより忘年会」

場所: 福岡県立社会教育総合センター

テーマ: 子どもの表現力向上の原理と方法

発表者: 福岡県穂波町高田小学校(研究主任村松啓介さん)

参加論文: 「表現力」とはなにか(仮題)(三浦清一郎)

フォーラム終了後センター食堂にて「ポットラック形式」(もちより)による忘年会を企画しています。食べ物、飲み物、デザートなどそれぞれに工夫の上御持参下さい。宿泊も可能です。当日はセンターのご好意でゆず湯が湧いているとのことです。お楽しみに。「持ち寄り」が困難な方は当日会場に参加費をお支払い下さい。

準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。(担当:肘井)092-947-3511まで

第40回生涯学習フォーラムレポート

第40回生涯学習フォーラムはいつも会場としてお世話になっている福岡県立社会教育総合センターの20周年の記念事業に参加することになった。特別プログラムはシンポジウムである。テーマは「今こそ、体験活動の質と量を問う」である。今や体験ブームであるが、状況を見ればまさしくその「質と量」こそが問われるべき課題である。「質と量」を問えば必然的になぜその質を問題にするのか？なぜその量を問題にするのか？が問われる。そうなれば目的も、方法も問わなければならない。タイトル選択は事務局の慧眼であった。

登壇者は大村璋子さん(環境デザイナー、世田ヶ谷プレイパークの創始者)、今井佐知子さん(大留蒲鉾取締役)、やまぐち子育て県民運動協議会会長、日P会長)、正平辰男さん(東和大学教授)の三名。司会は三浦清一郎(社会教育・生涯学習研究者)である。

話題は極めて多岐に渡ったが、筆者の関心の範囲でまとめれば次のようなことであった。

1 親には育成責任、製造責任があるが、その責任が十分に果たされていない。「子宝の風土」の親はいつでもそうである。特に、驚くには当たらない。

い。問題は自分の子の「生きる力」の衰退に気付かない事であり、気付きながら助けを求めない事である。

2 現象的に「生きる力」は遊びや生活の基本技術・態度に現れる。それゆえ「遊育」が必要であり、「生活育」が不可欠である。今井さんは「蒲鉾作り」で、大村さんは「遊びを作るプレイパーク」の実践で、正平さんは庄内町「生活体験学校」でそのことを確認している。プログラムのルールに従わない子どもは参加を拒否する。言ってみれば分かる時もある。言ってみれば分からない時もある。

言ってみれば分かる子もいれば、そうでない子もいる。参加者の層によって生活やプログラム参加の前提となる基本能力が異なっている。志願してきたものは相対的に基本能力は高い。したがって、志願率が高まれば、基本能力にばらつきが出て来る。全員を引き受ければ、「少年の危機」のすべての問題が出て来る。

3 「子どもにとって遊びは生活である」と大村さんは言う。同じように、暮らしもある意味では遊びにできる。「生活体験学校」は遊びと暮らしの混合である。その暮らしの基本ができていないと正平さんは指摘する。したがって、子どもの自主性に頼っては行かない。「他律」から始める。他律の中

で、次は「どうしたらいいと思う？」と、「自律」を促す。今井さんも両者をミックスして活用すると言う。プログラムへの参加は「納得と合意」が前提である。そこから外れれば「帰りなさい！」と言わなければならない。

4 子どもの指導にはそれぞれの信念がある。信念がなければ出来ない。子どもも指導者も最後の拠り所は自分の信念である。会員数1,100万人の日Pの組織でも同じだったと今井さんは言う。大

村さんのプレイパークもそれぞれの賛同者の熱意が支えている。恐らく、生活体験学校も、「他律」8割、「自律」2割ぐらいであろうか？現代の「おさま文化」にもかかわらず、指導者の指導意志が貫

徹している。「他の子どもの体験の邪魔をするな!」、「ここは学校じゃないんだ」という今井さんの啖呵が小気味いい。しかし、学校では何と言うの

だろう。「ここは家じゃないんだ!」ぐらいが言えたら合格であろうか?

5 遊びは「手順」を問わない。継続の責任を問わない。結果の成否も問わない。子どもの挑戦を遊びから始めるのは当然である。楽しみと主体性の素材は生活のあらゆる場面に遍在している。要は、本人の発想と指導者の工夫である。子どもの共感やエネルギーを成長のプログラムに組み込むことこそ体験プログラムが問われている課題である。失敗もいい、成功はもちろんいい。遊びもいい。仕事もいい。他律も必要で自律も不可欠である。

そのためにはプログラムにおける体験の一定の量、一定の質が問われる。シンポジウムはそのことを再確認した。しかし、想定されるプログラムの「質と量」についての分析は必ずしも十分ではなかった。各論の具体的追求は異質の登壇者を招いたシンポジウムの形式に馴染まないのかも知れない。次は同質の登壇者の間で「質と量」の議論をしてみたい。

MESSAGE TO AND FROM

11月は体力、気力、忍耐力、そして愛嬌と勤勉のバランス実験となりました。北海道から沖縄まで日本を縦断しました。沢山の方々にお会いし、何種類もの講演や会議をこなしました。文字どおり「生きる力」が試されます。体力だけではダメ。気力だけでもダメ。勤勉が不可欠であり、愛嬌も不可欠で、なによりも「生きる力」を構成する各種要素を総動員して、バランスを取ることに努めました。気候を抑制し、活動を選別して「体力」を温存できるか?疲労困憊の中で、気力を振り絞って、ニコニコ笑っていただけるか?勤勉を積み重ねて次の準備、次の次の準備にすすめるか?熟年の「生きる力」も少年のそれに劣らず重要であることを痛感します。

先々月のアメリカに続いて「やったことのないこと」、「であったことのない方々」、「行ったことのないところ」へ出かけて、時に若い日々のような興奮を覚えました。新しい出会いを通して沢山の収穫を得ました。当方のお礼が間に合わない内に沢山のお便りをいただいて焦っております。いつの間にか、電子メールがなければ決して可能ではない仕事のやり方になりました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがございましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★長崎県野母崎町 本村信幸様

不参加者をどうするのか?プログラムが優れていればいるほど、ご指摘の点は生涯学習の泣きどころだと思います。通学合宿も、野外体験も、生涯スポーツも、ボランティアも、選択肢の一つに過ぎません。「パンとサーカス」が圧倒的な威力を持っ

ている現代において生涯学習の競争力は誠に危ういものがあります。それゆえ、参加しないものをどうするのか?、と言う質問は絶えず登場します。しかし、子どもにすらも、生涯学習を「強制」するわけには行かないでしょう。全員参加の野母崎町の樺島合宿は義務教育の延長なのであって、本来の生涯学習ではないのです。義務教育は子どもの問

題の全体を抱え込みます。生涯学習は参加者の問題しか抱え込みません。おねしょの自立ができていない子どもの参加は義務教育の延長だからこそ起るのでしょう。したがって、義務教育こそが「通学合宿」を実施すべきなのです。しかし、現在の学校にその意志も、意欲も、時には実施の能力もないでしょう。

「選択原理」の必然

生涯学習は国民に学習を強制しないことから出発しています。そのためにわざわざ「生涯教育」を「生涯学習」に改名までしたのです。それは原理的に個人の自由に関わり、個性の尊重に関わります。選択原理は生涯学習の必然です。したがって、生涯学習を選択しない自由も必然です。結果的に、生涯学習格差もまた必然です。「参加しない子ども」は生涯学習の選択原理がもたらす格差の「結果」を甘受しなければなりません。子どもに限らず成人の場合も生涯学習に代わって、「パンとサーカス」を選択すれば格差は拡大します。自由とは「選択」や「格差」の別名、平等とは、機会の公平に限定しない限り、個性の否定、努力の軽視、一律・一斉主義に重なります。

ご指摘のとおり、サマースクールであろうと、土曜スクールであろうと、通学合宿であろうと、参加しない子どもにとっては体験の意味は関係ないのです。そしていつか文科省が学校の自由化に踏み切れば、筆者のような人間が「進学塾」も「学校」も兼ねた、保護者の要望に答え得る「体験学校」を作っていくのです。

★福岡県宗像市 古野ミワ子様

正論の妥当性

いただいた資料を興味深く拝見いたしました。再び、「政治的妥当性(Politically correct)」の問題を考えました。新聞に掲載された論説よりは、みなさんのグループの指摘が正しいことは明白です。だから、両論を分析するまでもありません。しかし、正論を言えば、結婚が壊れ、一つの家庭が崩壊する時でも、敢えて、正論を言うかどうかは別の問題です。結婚が壊れるかも知れない正論を妻が

聞きたいかどうかは別の問題です。人間は正しくなくても生活しなければなりません。分かっているのに正論が言えないのはそういう時だと思います。自分自身はもちろん、家族も、友人も満点ではあり得ないからです。研究者として、“政治的にこじれている”問題に近寄りたくないのはそのためです。研究の成果に自信があっても、正直に正論を言えば、抗議の電話が殺到して家族に迷惑がかかることを考慮せざるを得ません。世間は「ばか正直」といいますが、政治的妥当性を無視するのは「ばか」なのです。議論の分野によっては、「街宣車」も来れば、集団の抗議も来ます。「風の便り」が政治や宗教を論じないのはそのためです。

★福岡県苅田町 中園成人様

住民実態調査の件、できることがあれば喜んでお手伝いしましょう。調査の目的、内容をお知らせ下さい。既存の調査で応用できるものも沢山あります。生涯学習や男女共同参画の問題は、基本的に、未来のあり方を問うています。それゆえ、住民の実態から答が出るとは限りません。現状の延長上に未来の答があるとは限らないからです。現状の否定の上に答があるかも知れません。未来への意見を持たない時、調査会社や社会教育の多くの調査が意味のない重複を繰り返しているのはそのためです。暮らしのあらゆる要素が共通化している日本社会において隣の町とそれほど違った実態はないでしょう。未来の展望が語られる調査ができるか、否か？財政難時代の調査はそこが問われると思います。

★長崎県長崎市 藤本勝市様

長崎へ伺うことが多くなりました。応援をいただいた賜物です。草創期の生涯学習実践研究交流会以来の交流が復活して喜んでおります。すでに四半世紀が過ぎました。時には、定例のフォーラムにもお出かけ下さい。どんなに情報化が進んでも、人々の直接接触が基本であることは変わらないでしょう。お目にかかった人々の応援と評価に励まされて毎日を暮らしています。特に、肩書きを捨てて以来、「無印良品」の証明は友人知人の承

認が基本です。手厳しい読者に支えられて、「風の便り」も5年目のサイクルに入ります。思いがけぬ郵

送料の応援を有難うございました。

過分の郵送料をありがとうございました

千葉県印西市	鈴木和江様	福岡県苅田町	中園成人様	福岡県太宰府市	大石正人様
福岡県春日市	田中久記様	熊本県本渡市	富崎剛章様	長崎県野母崎町	本村信幸様
福岡県星野村	森松 稔様	福岡県立花町	中村富治様	福岡県大刀洗町	谷口由美子様
沖縄県西原町	井上講四様	福岡県庄内町	正平辰男様	東京都東村山市	小久井明京美様
福岡県八女市	杉山信行様	福岡県福岡市	松田 久様	福岡県福岡市	西島彦一郎様
島根県吉田村	松島俊枝様	長崎県長崎市	藤本勝市様	北海道札幌市	笹森千登世様
宮崎県宮崎市	飛田 洋様	大分県臼杵市	常賀博義様	佐賀県東背振村	最初三千夫様
福岡県宗像市	古野浩様	福岡県福岡市	山本智子様	山口県山口市	西山香代子様
福岡県飯塚市	稗田佳子様	福岡県宗像市	山口恒子様	福岡県筑紫野市	相戸晴子様

「風の便り」2003年号の登録について(2回目) 1年区切りの購読更新の季節になりました。

「風の便り」も47号となり、やがて5年目のサイクルには入ります。一年間のご支援ありがとうございました。多くの方々のご支援のおかげで、来年も購読料は無料で続ける事ができます。購読をご希望の方は90円切手12枚を同封の上事務局までお送り下さい。すでにお知らせしているとおおり、アメリカの藤本 徹さんのお力添えで定例のフォーラム「参加論文」と「風の便り」を共にオンライン化しております。併せて御利用下さい。前号にメッセージカードを同封しました。ご意見、感想など御自由にお書き下さい。

編集後記

おれは「潜在的疾患者」か

秋晴れの日が続いて毎日の山歩きに余念がない。小犬のカイザーのお陰である。森の風景は秋色が刻々と変わる。すでに桜の葉はちり終わった。紅白の山茶花が一斉に花をつけた。風が時に肌寒い。森に守られた日溜まりの水辺を動かたくない時もある。毎日歩いているせいで足腰は大分強くなったような気がする。プールも組み合わせているので運動量はこれまでの生活で最も充実している。小犬の元気につられて時に張り切り過ぎると必ずあとで膝や腰が痛い。若い時のやり方は捨てなければ、と思いつつも、つつい崖から跳んだりして、若い時の癖が出る。先日のテレビは、スポーツがストレスにならぬよう気をつけなさい、と報じていた。ジョギング・グループの人々が明らかに過剰運動になっているという。頑張り過ぎると乳酸がたまって廻り廻って突然死の原因になると警告していた。参照したスポーツ生理学の参考書も特定の部分に極度の「負荷」をかけるような運動は間違いであると指摘している。ウサギ跳びや極端なランニングや他人に背中を押しってもらうストレッチ等は全て身体に良くないという。特に中高年には「危険」であるという。とんでもないことだがこれらはすべて私たちが中・高生の頃に流行ったトレーニングの方法であ

る。制度やシステムに限らず、単純な健康スポーツの方法ですらも、ややもすると「古き間違い」を今に引きずっている。

「運動強度の増大は、特に高齢者の場合、確実に循環系および整形外科障害の発生頻度を増す。(中略)高齢者は潜在的疾患者であるとの認識が重要であろう。」^(*)熟年の「生きる力」の保持・存続は重要であるが、スポーツ一つ取っても高齢社会は新しい工夫が必要なのである。この一文を書いた時の研究者は幾つぐらいの人だろうか、と思いつつながら、俺は「潜在的疾患者」か、とつぶやいている。いずれにせよ、定年に間のある”若造”に「潜在的疾患者」などと呼ばれれば、「生きる力」の手入れの励みになる。過密スケジュールの11月も何とか乗り切れそうである。いつかは”お前さん”も私の歳になる。その時どこまでやれるか?「敗者復活」ならぬ「熟年復活」の勝負である。

(*) 紅露恒男、循環系指標、血清脂質からみた身体機能の活性化、臨床スポーツ医学、1987年12月号、P.1381

『編集事務局連絡先』

(代表)三浦清一郎 住所 〒811-4145 福岡県宗像市陵巖寺2丁目15-16
TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。
『編集事務局連絡先』まで 下記の 切手 または 現金 をお送り下さい。

*新規に12月号・来年1年分ご希望の方: 90円切手13枚 または 現金
*来年1年分ご希望の方: 90円切手12枚 または 現金

『オンライン「風の便り」』 <http://www.anotherway.jp/tayori/>